

## 自分と向き合う

六年 R・T

正直になること。これが今までの私に足りない部分であると思います。私は自分に対しても、また他人に対しても正直になることを恐れていました。私は、ものをはっきり言うタイプに思われがちで、周囲からは、誰に対しても率直に意見を述べ、正直に生活しているように見えていただろうと思います。けれども、物怖じせずに発言する姿は、私の一面にしか過ぎず、このような存在でいたいと願っている私の意思と、皆の目に映っている自分の姿が、少し異なっているように思えて、生きづらさを感じていました。それにもかかわらず私は、自分にも他人にも、心を開いて本当の姿を見せることができないでいました。私には、自分が学校の中で、のびのびと生活できていないという思いがあります。周りが私に対して抱いている印象からなるべく離れないように、皆のイメージ通りの自分でいようとしていました。学校で正直な自分でいられない生活は、多くの点で不自由で、自分に納得できない部分もありましたが、私はその状態を、自分から働きかけて打破しようとはせず、自分を取り囲む環境、つまり学年の雰囲気や友達のせいにしていました。

イメージ通りの自分とは、簡単に言えば、先頭に立って引っ張る役割を果たす人です。生徒委員も今までで三年ほど経験し、昨年度はクラブリーダー会会長という、クラブ部員全員のことを考えて活動していく大きな役割を担わせていただきました。私は、人をまとめたり、引っ張ったりすることが決して嫌いなわけではありません。人をまとめることは新たな価値観に触れる機会ともなり、クラブリーダー会の運営は、価値観が全く違う者同士をどうやって協力できるようにするかというある種の合意形成を行う機会でもあったので、どちらかといえば、リーダー会会長として過ごした時間は、とても好きな時間でした。先頭に立っているわけですから、大きな声で注意することも多くありましたし、他に対する影響力のある立場にいたことも自覚していました。やりがいを感じ張り切る一方で、そのような立場だからこそ、自分は友達に弱音を吐けない環境にいるのだと追いつめられているように感じていました。客観的になって振り返れば、他人の目を気にしすぎた私が勝手に一人で悩んで、周りに包み隠さず思いを打ち明けられなかったただけなのに、他人によって作られた自分のイメージにこだわる自分のことは棚に上げ、このような私を作った周囲の人々のこ

とを責めていました。

また、昨年度のクラブリーダー会で私は、新たに取り組んでみたいことを提案したことがありました。当然のように、提案が受け入れられ、協力を得られるに違いないと考えていた私にとって、そこにいた多くのリーダーさんが一瞬でしたが、陰悪な表情をみせたことは、とてもショックでした。提案を検討することもなく、面倒くさいといわれた気がして、意気込みが大きかった分、その時の私はとても孤独を感じました。先生の口添えのおかげで、最終的には取り組むことができましたが、正直な気持ちを言えば、提案が具体的な活動に結びついた達成感や充実感よりも、先生に言われたから取り組むことになったという状況が、私にとっては大変に辛く、その時は、提案したことを本当に後悔し、新たなことに挑戦しようとしめないメンバーにがっかりさせられました。

私の学年は、入学当初から、静かで真面目だと評価されてきました。六年生の中には、そう言われることに対して、特に何とも思っていない人もいますし、このような雰囲気の良い面であると自信をもって、自ら公言している人もいます。実際、授業もスムーズに進みますし、先生から言われたことではありませんが、別の見方をすれば、私たちは消極的だと言われているように私には考えられたのです。その私の考え方が間違っているわけではないのだということを昨年度の学年目標「虎穴入らずんば、虎児を得ず」が私に気づかせてくれました。この言葉は、虎の穴に入らなければ貴重な虎の子を得ることはできないという意味を持ち、多少リスクがあっても、危険なことを冒さないと貴重なものは得られないということを表しています。この学年目標によって、学年の中に積極的に新たなことに挑戦するということができている人が多くいるということ、つまり消極的な人が多い現実を突きつけられたのです。周りの友達がどれだけその目標について考えたかはわかりませんが、私はこれを聞いたとき、今まで自分自身感づいていながらもうやむやにしていた自分の足りないものが明確になったと思ったのを、今でもよく覚えています。自己を主張しつつも、リーダーシップがあるという他者からのイメージに沿うように行動してきた私ですが、幼い頃のように自由奔放ではいられず、常識や慣習などにとらわれて、実は、心の内を明かすことが怖くてできないという、私が避けようとしていた自分の現実を突きつけられたように感じ、悔しさを覚えました。私は、そのようなことは二度と言われたくないと反発する気持ちを抱きましたが、この学年目標に奮起して、変わった人、または変わろうとした人は私の目

には少ないように覚えました。感じていること、思っていることを自ら働きかけて語り合おうともせず、私は周りの友達と自分は違うのだと思い込み、好きになれる友達や、正直な自分で付き合える友達は、本当に少ないのだろうなと思っていました。しかし、学校で正直にいられない本当の原因は、他人にではなく、自分にあったのです。本当に正直な自分を出すということに対する勇気が、足りなかったのです。恵泉生活約五年で培われた私への信頼を失うことや、卒業まであと数年しかない所まで来て、急に自分を変えることで、周りから変に思われることがとても嫌だったのです。自分自身を変えようとする勇気が足りなかったという点では、私も虎穴に入れていなかったのかなと今は感じています。

毎日の生活に追われていると、じっくりと自分に向き合うことは難しいことですが、五年生になって、いよいよ本格的に進路を考えなければならなくなり、自分のやりたいこと、興味のあることを探し、自分が将来どんな大人になっていきたいかを考え、それらを明確なものにしていかなくてはならなかった時にも、私は、自分に正直さが欠如していることに気付きました。自分と向き合い、自分に正直にならなくては、進路を決定することができなかったのです。大部分が他者のイメージによって作られていると感じていた私にとっては、このことは乗り越えなくてはならない大きな壁でした。

将来進む方向として、四年生の頃から、ただ漠然と国際関係という方向性だけは掴めていました。四年生の夏休みに海外に初めて一人で行ったことが決定的な理由です。けれども、国際関係の中で学びたい分野が、政治であるのか、宗教であるのか、はたまた文化であるのか、そこは全くわかりませんでした。なぜなら、全ての分野に興味がそそられていたからです。その分野に進むべきかは、時間が解決してくれると思い、一度は敢えて考えるのをやめてみましたが、それは何の役にも立たず、ただ時間を捨てただけでした。そこで私は、自分がどんな大人になってどのように社会に貢献していきたいのかを考えてみました。初めに思い描いた自分の将来は、人と深く関わって生きることでした。人と深く関わるのに大切なコミュニケーションをとることが私は好きなのです。それは他人の価値観や考え方を知ることができる機会になるからです。この好きなことを将来もずっと続けていきたいと思っています。そしてもう一つ思い描いたことは深く関わる人が日本人だけでなくむしろ外国人であるということです。先ほども述べたように私はコミュニケーションを通して、自分の知

らない新しい価値観に出会いたいのですが、その価値観は日本全国に住んでいる人のものではなく、むしろ全く違う環境で育った人たちのものを知りたいということです。確かに、日本でも東京で生まれ育った人と地方で生まれ育った人との価値観には差異がそれなりに大きく存在すると思いますが、私が知りたいのは日本人と外国人との価値観の差異なのです。そしてそれを学ぶためには、コミュニケーションのツールとして教養が必要であるとも感じています。一見、無駄であるかのように思われる教養が身につけていけば、相手との関係をよりよく保つことができる可能性が広がると思うのです。このように自分の将来像を考えていくと、私が国際関係学全般に興味を持っている理由がわかってきました。

ここまで自分のことを正直に考えられるようになってやっと、私は自分の進路にある決断をしました。それは海外の大学に進学するということです。周りからは賛成意見も、反対意見も頂き、それらを考慮した上での決断です。私がやりたいと思っているコミュニケーションをとるうえでの大切なことは言語であり、生きた言語でコミュニケーションをとるようになるのと同時に、多くの価値観を得るのにはこれが最善の道であると思いますし、自分自身目で見て自分自身の体で体験してみないと判断できないと思うのです。周りに流されてとか先生、両親に言われてとかではなく、私は自分の正直な気持ちに従って進路を決められたので、今では周りにこれ以上何を言われても進路を変えない自信、そしてこのように自分の選択を皆に伝えられる自信があります。

私は、今までの自分の学校の生活の仕方を本当に後悔しています。それは五年間もあったこの恵泉生活の中で、同志と思えるような人をあまり作れていないからです。この人たちは自分に合わない人だと勝手に決めつけ、関わりを持つとうとしなかったのです。恵泉には自らの個性を大事にする風土があり、みんながそれぞれの価値観を持っています。新たな価値観を知ることのできる機会が、こんなにも多く潜んでいるということに、もっと早く気づきたかったとも思いましたが、ここに至るためには、様々な経験を積んだ五年間が必要だったのだとも思います。今は一年を切ってしまった残りの短い恵泉生活の中で、できるだけ多くの価値観を、多くの友人と共有したいと思っています。